会報第4号　　2016年6月10日発行

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　会報

ゴイシツバメシジミの郷

※写真提供：ゴイシツバメシジミの郷を守る会　会員
福井市　　佐合　直　様

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　事務局
〒868-0701
熊本県球磨郡水上村岩野2678　岩野公民館内
電話：0966-44-0333　ＦＡＸ：0966-44-0329

今回も前回に引き続き、当会会員の一人：野田英敏さんから寄稿していただきました「オオムラサキに魅せられて」後編です。今号は、飼育で育ったオオムラサキの放蝶会およびオオムラサキ飼育に架ける野田さんの想いについてのお話しです。

日本の国蝶　オオムラサキに魅せられて　後編

ゴイシツバメシジミの郷を守る会　副会長　野田　英敏

思い返しますと、もうずいぶん昔のことになります、私たちが小学生のころは夏休みと言えば毎日のように虫取りに行っていました。樹液の出ているクヌギ（どんぐり）の木にはクワガタやカブトムシがいっぱいいました。傍には、大きな石がおいてあり、その石をどんぐりめがけて投げます。すると沢山のクワガタが落ちてきます。そのうちの大きなクワガタを見極め素早く足や手で捕え確保します。そうしないと落ちた時は上を向いてもがいていますが、すぐに起き上がりどこかに行ってしまいます。カブトムシはあの頃はあんまり捕えませんでした。カブトムシを持って帰ると、「影千代さんを捕ってきたやー」とばあちゃんにいわれましたがどうしてカブトムシが影千代さんかいまもわかりません。

いつものようにどんぐりの木に行くとクワガタ、熊蜂（スズメバチのこと）がえさを食べているところで一匹のオオムラサキを目にしました。薄暗い中に羽がなんとも美しく映えて宝石みたいできれいで、こんなきれいな蝶がいるもんだなと思いました。それからが始まりで蝶を追い始めましたがそのころは蝶を捕える人は珍しく、他の人はクワガタばかりを捕っていました。当時はこの湯前町でもオオムラサキを目にすることはできましたので、山々を回って夢中で追いかけていました。

それから年月が過ぎ、紆余曲折経てようやく飼育が軌道に乗り始めたため（前回号参照）、飼育から８年後めでたく第一回目の放蝶会をすることができました。いなくなった蝶の復活と権限が少なくなった父親の復権とをかけて父の日に放蝶することにしました。場所は湯前町のグリーンパレス柴広場で湯前の観光にもなったらいいかなと思って行いました。チラシをはっただけで宣伝はしなかったのですが沢山の人が集まってくれました。蝶を好きな人がこんなにいたのかと思った次第です。ただ父の日のころは大半がオスばかりの蝶です。仲間と三角紙に蝶を入れて持っていき放蝶です。「どこに蝶はいるのですか」と聞かれ、「この中」というと怪訝な顔をされたのを思い出します。みんなに蝶の入った三角紙を渡し、テレビ等報道機関の方々も来てくれ　いーちーにのさーんでの放蝶１００頭ほどを行い盛会に終りました。

平成２６年も同じように放蝶を行ったのですが、ある人から電話にて放蝶をすると問題になる放蝶はやめるべきといった電話がありました。この人から第一回の放蝶会のときも電話があったのを思い出しました。大阪から幼虫をもらって育てたのが始まりという話が新聞に載ったためで、この人の話では地元のオオムラサキならばいいが、大阪のオオムラサキを放すと地元とのオオムラサキとの亜種になるの

でやめるべきといった話だったようです。私はオオムラサキがいなくなったので、放蝶し少しでもオオムラサキの姿を見ることができるように、また沢山のオオムラサキが湯前の空を飛んだらいいなと、子供たちが網を持ってクワガタ、オオムラサキを捕えに来てくれるようになれたらいいなと放蝶を考えたのです。私も放蝶するとオオムラサキが自然に生まれ育ちすぐにでもたくさんの姿が見られるようになると、そう思って毎年放蝶する予定でした。しかし、ハウスの中で沢山の幼虫が生まれても多くて一割くらいしか蝶になりません。一割弱の年が続き１０年に一度くらいしか放蝶会はできませんハウスの中でさえそういった現実です。自然界では自然が危機に瀕しています。どんなに多くのオオムラサキを放蝶しても、いまの山の状況を変えなければ育つことはできないのではと考えています。指摘を受けたため、今では近隣郡内の町村からの幼虫を育てるようにしました。

今、山を見ますと、下から上の方まで見通せます。石や岩があるのが見通せます。地球温暖化とか、酸性雨やシカの食害といったことが言われますが、詳しいことは分かりません。ただ言えることは、昔は下草といった木々がたくさん生え地面は湿気があり、いきいきと感じたものです。また、人の踏みたて道がどこまでもありました。それが、土、石、岩の表面ばかりとなって人の通った気配もありません。あの頃の山とは何かが違います。あの頃感じた静かな中でもいきいきわくわくとしたものを感じません。静かすぎます。

これでは、猿や鹿など生き物も山の中での生活は大変です。山を降り田や畑等に餌を求めて降りてこざるを得ません。クワガタ、カブトムシ、オオムラサキ等の餌となるクヌギは山に植えてあるにはあるのですが、樹液が出ていません。私は簡単に傷をつけたら樹液は出るものとばかり思っておりました。鉈で傷を付けましたが木がけがを治すように修復し樹液は出ませんでした。昆虫の介在が必要なのでしょうか。また、放蝶の時期が悪く父の日の放蝶会のときはオスが生まれてメスがその１週間後位からといったところで多くはオスの放蝶で、考えるとメスがいない空にオスばかりを飛ばしても増える訳がありません。今後はできたら７月初めころの放蝶を考えています。

オオムラサキの姿が湯前町で見れるようになり、子供たちが網を持ってクワガタ、カブトムシ、オオムラサキを捕え喜び遊ぶ姿、私の小さい頃の姿が見れたらいいなと思って飼育を続行中です。

野外で見かけたオオムラサキ　最近めっきり少なくなった。2012 年 7 月 15 日　水上村

2015 年度の活動内容

2015 年　6 月：「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」会報第３号　発行・送付

2015 年　6 月 5 日：「ゴイシツバメシジミの郷を守る会」第３回総会＠市房観光ホテル

・午後７時より、役員会、総会、懇親会を行いました。

2015 年　6 月 22 日～8 月 20 日：ゴイシツバメシジミ定点観測

・2015 年の初見は、6 月 28 日でした。

・確認できた個体数は、例年に比べ半分以下となりました。一過性の減少かどうか今後の調査が必要です。

2015 年　7 月 23 日：ゴイシツバメシジミ観察会

・会からは 2 人が観察会講師として、地元の小学生 16 人にゴイシツバメシジミについて説明を行いました＠市房山キャンプ場周辺。

2015 年　7 月 26 日：ソーメン小屋　屋根上の草取り

・ ソーメン小屋屋根上に自然増殖しているシシンランを保護するため草取りを行いました＠市房山キャンプ場。

2016年2月10日：九州中央山地希少野生生物保護管理対策調査業務検討会

・昨年に続き、人吉の九州森林管理局で会議が行われました。当会からの出席者も昨年同様、顧問の三枝先生、杉本氏、中原氏、および西、幸野が出席しました。

会員構成（2016年5月31日現在）

・個人正会員：１７名　　・個人賛助会員：１５名
・法人会員：　１団体　　・顧　　問：　４名
・事務局：１名（水上村教育委員会教育課内）

お知らせ

水上村情報誌「ゴイシツバメシジミ」できました。

前回の会報でお知らせいたしました、水上村情報誌「ゴイシツバメシジミ」がようやく出来上がりました。内容はゴイシツバメシジミの生態をはじめ、

・何故、市房山にこれほど貴重な蝶が生息しているのか？
・何故、これほど数が減ってしまったのか？
・何故、この蝶を守る必要があるのか？

など多岐にわたっています。

本会員が中心となって作成したこの情報誌は、水上村観光協会の事業の一環として村内外の方々に水上村の宝ものをより深く知っていただくため水上村観光協会から発行されました。「ゴイシツバメシジミ」の他に、「迫ん太郎」（米精米のための水車）も同時に発行されました。

「ゴイシツバメシジミ」情報誌は、ゴイシツバメシジミの郷を守る会の皆様にはお送りいたしますので是非ご覧ください。尚、本情報誌作成にあたり、写真をはじめさまざまな協力をしていただきました当会会員の皆様には紙面をお借りし、厚く御礼申し上げます。

会員募集

個人正会員、個人賛助会員、法人会員を大募集しております。それぞれの年会費は以下の通りです。

・個人正会員：2,000円（会の趣旨に賛同される個人、かつ会の活動に参加可能な方）
・個人賛助会員：2,000円（会の趣旨に賛同される個人。但し会の活動に参加するのが困難な方）
・法人会員：5,000円（会の趣旨に賛同される法人）

会員登録された方には、毎年発行する広報とゴイシツバメシジミ観察会へのご案内等、保護活動に関する情報をお知らせ致します。申し込み希望の方は、事務局までお問い合わせ下さい。

2016年　ゴイシツバメシジミ観察会

水上村教育委員会主催の「ゴイシツバメシジミ観察会」が開催されます。案内は当会会員が行いますので、まだゴイシツバメシジミを見たことがない方は参加してみてはいかがでしょうか？参加ご希望の方は、事前に事務局まで連絡をして頂き、当日は直接市房山キャンプ場までお越しください。

日　時：7月31日（日）　10時～12時
場　所：市房山キャンプ場（9時50分までに受け付けを終了してください）。
参加費：当会会員は無料。一般　500円。中学生以下　無料。

広報原稿大募集

広報に記載する原稿を、会員の皆さまから募集しております。ゴイシツバメシジミに関わらず、環境保全や市房山に関する記事でしたら何でも構いませんので是非ご投稿下さい。

後記

・今号も前号に引き続き、当会副会長の野田さんの「オオムラサキ」について寄稿していただきました。野田さんのオオムラサキ飼育を通しての想いは「昆虫がたくさんいたころの昔の自然」を少しでも取り戻すことです。私もその想いに共感するところ大ですが、なかなか難題です。少しでもこうした活動に共感してくれる人が増えることが重要だと思います。

・そのためには、この会のメンバーの多くの人がそうであったように子供のころ自然に触れる機会がとても大切ではないでしょうか？　当会でもゴイシツバメシジミの観察会をはじめ、今後、野田さんの飼育されているオオムラサキの観察会、昆虫の採集・観察会など子供を中心に多くの人に自然に親しんでもらう活動を広げていきたいと考えています。

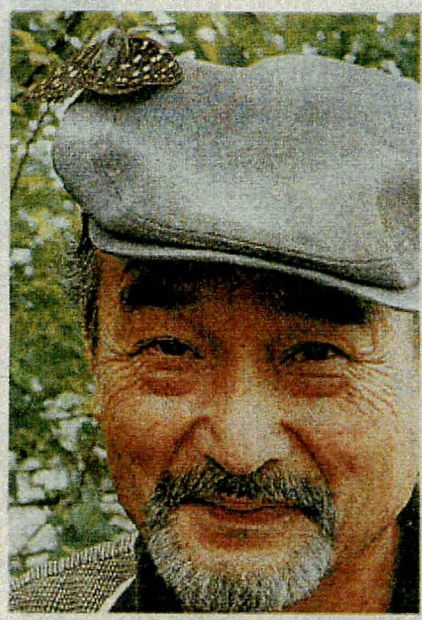
熊本日日新聞　2014年6月21日

オオムラサキ10年目の放蝶会

22日、湯前の芝生広場で

元町職員の野田さん

湯前町の山あい近くに建つ網張りのハウスで、環境省のレッドリストで準絶滅危惧に指定されている大型のチョウ「オオムラサキ」が飛び交っている。元町職員の野田英敏さん(64)が育て、羽化させた。8年間の試行錯誤を経て飼育に成功し、初めて開いた放蝶会から今年で10年目。22日、節目の放蝶会を予定している。



野田英敏さんの頭にとまったオオムラサキのメス―いずれも湯前町

「天候の具合か、今年は珍しくたくさん飛んでいる」。幅5㍍、奥行き15㍍のハウスの中では、約300匹のオオムラサキが飛んでいる。鮮やかな紫色の羽を持つのがオスで羽を広げた大きさは約8㌢。メスは茶の地味な色合いだが、約12㌢と一回り以上大きい。バタバタと羽音も聞こえてくる。

野田さんが飼育を思い立ったのは1996年。子どものころ昆虫採集に明け暮れた山に、小学高学年になった長男らを連れて行ったが、吉の山ではなかった。

30年前は木々に群がっていたクワガタやカブトムシの姿は消え、樹液を求めて集まっていたオオムラサキの痕跡もなかった。「じゃあ、自分で育てよう」。偶然見かけた新聞の一行広告が背中を押した。「オオムラサキを譲ります」。広告を出した大阪府の男性に連絡し、冬眠中の幼虫25匹を送ってもらった。

飼育用にと土地を購入し、総額約50万円をかけてハウスを建て、えさになるエノキの木を茂らせた。しかし、飼育は失敗続き。幼虫やさなぎが天敵のアリやハチ、ムカデなどに食べられたり、寒さで死んだり。えさも不足した。

飼育用ハウスのエノキの葉で羽を広げるオオムラサキのオス

天敵を食べる昆虫をハウスに入れ、樹液の替わりにとスポーツ飲料や乳酸飲料、焼酎を混ぜ合わせたドリンクを考案。周囲のあきれ顔をよそに、実に8年がかりで飼育を成功させた。

最初の放蝶会を開いたのは2005年。案内チラシを町内に貼ったら口コミで広がった。県外から訪れる人もいてオオムラサキのファンの多さも実感した。

野田さんは今月、1年で終えるオオムラサキの一生をカラー写真で紹介するパンフレットを自費製作した。500部印刷し放蝶会の参加者に配るが、「湯前に来たらオオムラサキに会える」と観光客が増えることも期待する。

オオムラサキがいなくなると、羽音が聞こえなくなったハウスは静寂に包まれるという。ただ、エノキの葉には産み付けられた卵も。野田さんは「終わりだけど、始まり始まり」と表情を緩めた。

放蝶会は午前10時から同町のゆのまえグリーンパレスの芝生広場で。問い合わせは野田さん（0966・43・2132）へ。

（知覧哲郎）

村民の郷土愛 冊子に

熊本・水上村

熊本県水上村に生息する希少なチョウや地元の農耕文化を題材に、村民自ら取材、編集した村PR冊子「未来につなぐ村の宝物」が創刊された。文献や研究者の監修に基づく専門性を誇る一方、情報発信する村民も随所に登場するユニークな構成で、自治体主導の観光パンフレットとは一線を画す。「村の自然や歴史を守り継ぐ」という村民の郷土愛が伝わってくる。

ここで生きる

自ら取材、編集 希少チョウや文化紹介

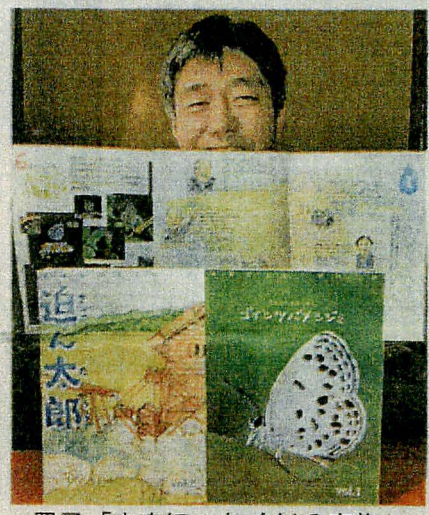
今月初め、創刊号と第2号が村観光協会から同時発刊された。農家や自営業者ら約10人が約1年前から「編集会議」を重ね、テーマや構成を議論。企画から取材、編集までこなした。

創刊号の特集テーマは1973年に国内で初めて同村の市房山で発見され、国の天然記念物になったチョウ「ゴイシツバメシジミ」。その生態や村民による保護活動などを同協会長の西和人さん(54)が写真やイラストで紹介し、チョウ研究の第一人者として知られる三枝豊平九州大名誉教授が監修した。

第2号は地元で「迫ん太郎」と呼ばれ、60年代まで精米に使われていた水車を特集。実際に使っていた高齢のコメ農家を若手農家が取材した。「ギーットン、ギーットンてないよった(と鳴っていた)」など方言交じりの解説や、移り変わる農業の様子のイラストが村の暮らしを伝える。

冊子は毎春、2号ずつ刊行する計画。西さんは「今は途絶えた風習なども記録し、次世代に伝えたい。都会の人にも手に取ってもらい、観光集客につながればなおうれしい」と話す。1冊780円(税込み)。同協会や地元民宿などで販売、郵送にも応じる。協会＝0966(44)0500。

(郷達也)



冊子「未来につなぐ村の宝物」2シリーズを広げ、伝承の大切さを語る西和人さん
＝熊本県水上村

553号　(日刊)
西日本新聞
2016年3月14日(月曜日)

明治・大正・昭和
九州の鉄道おもしろ史
●出版部　書店で好評発売中